

■出会い

- ・フィットアスリートのコンセプトは、アスリートのあらゆる動きに追従し、腰椎をサポートすることにある。
- ・体幹の動きに対し、遊びが多すぎる（滑りやすい）とパフォーマンスに欠ける。通常、このような場面においての対応で多く見られるのが、滑り止めパーツの付加である。シリコンやラテックス素材で部分的にミュー（摩擦係数）を高めるわけである。しかしながら、フィットアスリートのコンセプトは、アスリートのあらゆる動きに追従し、腰椎をサポートすることにある。したがって、生半可な滑り止め加工では、数多の腰部固定帯となんら変わりない。
- ・運送や倉庫業等では、滑り止め加工がされた軍手をよく見かける。
- ・これらの軍手は滑りやすい段ボールなどを側面で保持する際に、大変機能性が高い。
構造としては合成樹脂をドットまたは含侵させているのであるが、樹脂を含侵ドット付けしても軍手の延長線にしかならない。何か突破口はないか。
- ・折しも、ニット産業の盛んな北陸地方の業者より、軍手などの樹脂をミクロ単位でコートした試作品を見せられた。『これだ！』と唸ったのは言うまでもない。

■ハンドメイドと量産の違い

- ・しかしながら、見せられた試作品は職人が丁寧に塗布したプロトタイプ。果たして量産できるのであろうか。
- ・ここからは失敗の連続。既存の機器ではミクロ単位（それも $0.1\text{ }\mu\text{m}$ 単位）でコーティング圧をコントロールできない。結局は厚み、プレス圧、コーティングスピード、温度あらゆるファクターをコントロールしなければ職人スペックは世に出せない。
- ・結局、生地加工の協力会社に数千万円の投資をさせ、各ファクターの微調整が可能となった。といっても無限大の組み合わせから理想的な組み合わせを見つけなければならない。

■ミクロとマクロの戦い。

- ・今回のフィットアスリートのコーティング層は、肉視レベルでは見分けのつかないマイクロコーティングを行った。機械セッティングはデジタル調整で一発であるが、試作検証は何百メートルの原反を会議室のテーブルに延反し、手のひらをゆっくりと当てコーティングのムラのチェックを延々と行うのであった。
- ・まさしくブレンダーの世界だ。『OK』のサインが出るまで、果たして何百メートルの原反が手のひらを通過したことか。
- ・考想、立案から遅れること二年余り。フィットアスリートはそんなエピソードの結集でもある。